上杉

藩鑑

百五十五

内閣文庫			
和書	三四六八二號	二八〇冊	一五八函
類			二四架

内閣文庫		
番號	和 34682	
冊數	278 (155)	
函號	159	1

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑卷之二百八十二月録

う部五

上杉彈正大弼友示輝虎

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑卷之二百八十二

上杉彈正大弼藤原輝虎

一　天文二十年二月中旬川田豊前守越中より
罷帰り来りて京虎に言上しくいろく
土肥左衛尉佐渡守諸将味方に隨順して
二心なきやうへうさる共旨堅く誓諾せりこの
上は急ぎ出馬なすべし然らば神保椙若等

り定めらるゝ降参致さへし若まゝ死に生し
八土肥左衛門佐等に仰付られ先と退治あり
へきよしいへり此外に密事ともあり同年
二月上旬甲斐國より来虎丸月代の者帰り
来りて言上しくいやらく吾ひそうは受晴
信を公に対して合戦を挑む事と一大事
とせしも老臣丸軍功の法侍及ひ軍に参
はしる者ども集りて取軍丸評議区区

なりといふまゝ紀州高野山より妙法坊心場
といへる信甲府に来りて近習丸罷在市
川七郎右衛門尉といふ者と憑みて時信り
場し虎の巻といふ軍配書を秘し晴信即
ち先と信授して秘蔵とせられ即ち心場
に信濃丸中にといふ二笠原寺代と号所せ
らるといへり来虎先と笑て笑て宣ふく支
虎乃巻を創術丸日取方先の書を軍術に

といふ用ふ小生〜せ〜いひて宇生と云て問
ていまく洛り天官軍所ゟ書の中に虎ゟ巻ゟ
まやを理ハいかん宇野答ていまく虎ゟ巻ハ
剣術の要ゟ〜いへ〜も老又愚者と雖ども
たゆる用ひ〜ゟ事に達し〜ゟ者の伝ゟ
事に行〜ゟ恐して天官の事軍術にと
いく無益ゟ良将ゟ叶に當〜く宜さと用
ゆ愚将ゟ常に此ゟ拘ゟて人和時宜と要
と申ゟ事と知〜ゟ實に察せゟ人ハ行
へ〜ゟ〜いへ〜ゟ糸虎ゟと云〜ゟ理ゟ下
ゟ〜ゟ感ハし給ひさ　戦後軍記

一　天文二十年三月府城の兵法不ゟて宇佐
駿河ゟ敬藏ゟ高典及ひ神武勇徳の議論
ゟり侍大将以下ゟ有日脇迫の面〜ゟ席に
列ゟ者多し公ゟ三月に二三度つ〜必
ゟ〜ゟ法乃講説とゟさ〜ゟ且ハ當家

其武備且々神武高典と考行あるべく
加治遠江守栗田刑部少輔等に命せられ
連々事記と申付られ天保初に至り漸く
編述乃功と終り候ものなり　小藤覚書

一
関左八州は管領上杉氏郡大輔憲政小隊
氏康の為に圧倒と廢し〻く春日山城へ
走り来り来虎に対面して告ていはく
そも〻〻憲政累年逆徒小隊氏康と計亡

さんと欲して毎度合戦に及ぶといへとも
勝負と決せさるに上杉家漸く衰運傾
廢は時節到来せしかは今度武州河越
よりいく〻氏康のたのに大に勝利を失ひ扇
谷朝興戦場に命を殞し其外一族は半数
多討き残る者とも忽ちんと変して逆徒
小隊に與し却て予に向ひ弓を引き
仮て平井と保護せ事叶て遂に當城へ奔

定せ今より以後上杉氏英に東國
管領職と称して永く京虎に授与せ憲政
上州一國を以て法者せへし速に逆徒と
征し之を滅して氏康と決戦せんとす
へし関東いよいよ及て陸奥出羽すでに平
治して京虎管領し給ふへしと演述して
上杉氏系圖一奏英に管領職補任の綸旨
を京虎に下し給ふと言ていまく作今憲

政氏作と共に尊意を不と材ふに詞を
支ふ夫れ氏業拓盛衰古今の慣
ひなり所なりに貴意を悩まさへ作
京虎小國に軍を出て不能なかれ先亡親
追孝を為より彼國に軍事を創業すに
ふ作ふ作きとも上杉氏の人歴を案ずに
るに忍ひ氏上杉氏に未春小田原より発向氏康
退治の計略をなし憲政乃憤懣とやせ

へ〳〵且つ上杉及び京兆関東管領職は
事ハ禁廷へ伺ひ奏聞を経つゝ将軍家の
命を蒙〳〵そして私〳〵て憲政は
恐〳〵かゝ〳〵紀れも京兆一身にといく
氏康〳〵云ふに及ふへき宿意なり紀りに上杉
及び石代〳〵て東國より出軍〳〵小係と称り
東國は諸將と与へ〳〵て京兆私意
と以てみ〳〵に他は國と対さるは逢横天

道と重ねそのさまに志〳〵く仰に任せ
り稱號とけ〳〵て東國管領の事も亦
之命に従ひ〳〵へ〳〵府城にといて憲
政の居館と管領と扶助料若干と恩典あり
て熱志浅〳〵は憲政大慶に〳〵志〳〵く
賛氣と熱さあらろ　春日山日記
小越家書

一

関東は管領山内は上杉憲政越後に来入て
京兆に対場して謂て曰く我積年逆徒小

孫氏康と伝代せんと欲して志を合戦に
及へり然るにいま邦君利を失ひ勇を失ひて
つゝ十計且絶ちいまゝ我性名及び管領
職と永く貴方に譲共へ吾ハ上野に隠居せへ
し速に小孫と退治して関八州と平均せ
ん管領職と継ぐへしと家虎言ていく
貴命を謹ん奉る敬く奉承せさらんや
東陽より他事とさし置く小田原表に

進発し小孫氏康氏政と退対し公の憤激と
散せへしと諸国是にとりて小孫丹後に
命じく汝ハひそかに上州平井に住て志を
くを地に居止せしめ氏康の改道行跡の國
風と見聞して委細に注進せへしといへり
小孫命を蒙り即ち上州に赴きける 戦国年代
一 天文年四月京虎公長尾弾正忠京連と
魁帥として六子信玄と率せる主戦中九

國境に出張し給ひ遊佐有坂長津等の先方
方々を攻落し敵地を討平け給ふ此時小
井手城限り新川郡之内一味方の所廣
と成れり長尾氏行同弘氏と小井手城に殘
し置れ越府へ帰陣し給ふ 小越家書

一 永禄公六月七月越中國境に陣し彼國へ
と出ひやかし防ぎ敵と出合ひ防ぎ
ハ佯り遁おくし敵とおもひのまに驕り

しめ伏云かまうを以て才遠を計小國越
成とふるひ永禄元に西股城を攻こと堅固に
仕寄老臣某と殘し置云と綱く春日
山へ凱城清率れ有功を淺深と穿鑿し
賞罰と行し給ふ賞を厚く罰ハうすく
勧善懲惡れ鉅に中る中りなきハ諸軍物
れ勇み進む事ひとうも万未千草れ陽
氣とうけく春日より向に異なるを大ト

上下恩賞に浴せりと云ふ　春日山日記

一　天文廿年政虎公毛利中國魚津表へ出張あ
り大なる先陣は林右衛門和泉守家橘右馬
頭殿川田豊前守親章に命ぜられ
川田系陣成り出さにつき色部修理亮光實
と以て橋本部將成さしめらる既に公先
發ゑ戦中國へ向ひ板垣信堂と集め
本途に進へ一戦を遂んと欲しけり戦

況朝倉義景越前の一揆退治して
彼國へ大軍を向れ小谷に出陣
又へ行やうく籠城して運を天に任せ
し要害に寄るとまつ戦ゑ城と固みくる決
地を放しつけ攻る板垣郎等勇を振ひ
防戦を成せるに神保安藝守先年讃
州板垣の急難を一向見放して後日
人口如何なりしと千騎人魚津へ寄

後巻と成さうむまと見て土屋村田甚太
川上遊佐西こゝを除き助援して魚津へ
打出一勢こゝ也と張り月に成て戦し政
虎の軍監と以て欲と伺ハしめ又自身大内
見に出給ひて諸將に命令して其配りと
定めらるる為て命せらるる如く他力と頼と
申合隙きてりたてこゝさと為し毫二毫之に
対せる欲とやうして拉ふさまにかけち
し彼板谷等と進拂ふへし さあれハ最初
より城と固む人数とあるこゝ奉仕こて大
手搦手西不れ虎口と堅固に押へ城外の戦
果て後を競ひに乃り後之急に拉く事肝
要しるへき旨と仰渡さる宇佐美入道五郎左
衛門さて城之後巻に力と海て味方と喰と先
と搦手より突出一番て仕るへしそ搦
手へ引さ虎口前れ道細く萩薄ち交り

こゝ野中に新手を伏せ早稲定の刻限
に乱れ駆け入道朱傘に金の短冊付捺物と
さし赤毛の馬に乗りて国府と輝く色部
外股の人数とひさかけゝる城兵これを食止
んと真しくに駆出る宇佐美よりとく
持ち出やに孫平と退くむ敵機に乗
るゝ赤ひ来ると一の伏兵速に起立く
左右より挟みうち遂さに宇佐美も返し

合せ城と攻入風情を成せ敵木戸口に取支へ
く最初の術に再度付と食ハんや只主矢
に射取れ口に罵り矢ふせまを仕して
さんくに射る宇佐美下知して早く味方の
物とひさゝる能して已一騎宗房二三遍
悩乗して城をさつとにゝ乗り馬の鼻を返
し四百二度に設重ゝる十字付竿を左右一度
にひさかけゝ赤ゝと退さ去る変よとい

て板垣七郎ひれあまたを討ち城門をひら
うせ真先に進めり士卒我劣らじと切て出
る川田豊前守清かしこく種子島小筒を
連射打にうしむ敵も同章なりく示と
色紙作股迫り合せ珍先を採て突て拔う
をひまに左右より殘しうる伏勢一隊城中
へ押入外構へ門塀に火をかけ一隊を
打出て敵に取切て示後より攻たつる

板垣七郎此形勢を見て運命張りとや
れもひりしと大幡をかとうるに引付馬の
に引交縅横を碍にしてきけう川田豊前
守旗を押立城門へ乗入と見て及むる者乃
敵を薙拂ひなさひ遠敬し馳廻しく
川田を討んとする迫く来りうと豊前守殘を
追取馬上より突落す板垣則ち起あうるを
川田郎徒ひり手をうして遂に首をとりうう

けり大名にといてを林斉和泉守余とすりく
奉行をつとめ橋本に軍ひらと覚て鎮波
野しく大名の見えいとや れハ京都さ
もひ出まし川田に先とせまとけさこそ残念
なきとく麻垣延成末と面倒させ一の末戸と
押やりて無斬に入る城将板倉刑部
少輔さしもの老をれハ残年と下知して
文人を元来決断とも強く勇猛の林斉

西もかを出迎入しハ城をいかく狼狽して
城将刑部少輔も底を蒙り林斉ハ被官に生捕
れ城をすて落ちけるを大功之所より
見く戦死の高憤友に乱して散をかくく
後逐信乙士大将及び有司と呂して成れ一
戦右形骨をしさに絶て正しく先ハ死
と報を積年乃積恨を入り一時にひらけれ
されハ囚人板倉政廣ら首と刎て實検の礼と

陸行せしめ給ふ字佐大駕に入道を命じ給ふと家
を昔時源義経濃州年礼高松殿より
ひに新田義貞相州鎌倉殿高例と親しく
見と執行せしとなり　小戦家書

一
天文二十年九月上旬公姫君と行ふ〜あれ
と杉戦後政虎と稱せそのち之田の部方為
小笠原計助為人と東國へ遣はさる先来年
憲政殿たりと之州へ戦山に給ふへき殿先尾

一聲齋長師方田と始め京管領家に志あ
る家成邑と堅くなり政虎の主張とまち
りけかと合せ調略仕へき門意と論せへと
あり又小原安藝守長朝と石して宣ひらる
我いま憲政殿壌と海て之杉乃家號と胃せ
ら天殿面目これに出せ殿ハ州年坂東く
戦山に戦上二州のるに旗と建て安尾と
そうらんと欲せ殿しなるる彼境の事年一

地形不案内にして列侯士卒共に人根と知る
中第二氏康普通の将にして大國と称する
ものつけ一族家人参れる〳〵関東武士多
それ容易に成かゝる運否の至極時に応じ
拙者ハ足下辛労かゝる間諜にて彼地に
ゆき小隈氏共を説諭法将の動作を見に成と進
注進ありて平に用得ふさむへし編る足
下共武を老功と頼み入ゆへ向者共

法将と味方に引入しゆと励むへき旨と宣ひ
合りゝきそれハ安藤る最りゝ老後大事共
作と家る成れ法仕りゝしと以る他り
濃るへき一城を〳〵收ハ愚案を盡して秘計と
廻〳〵賢意共補に備ふへしと仰せ
居城杤尾と立て東上野の地に赴きけり
月之
一
小隈氏康勢ひ強大よ成り平井共味方日を

迚て滅す唯今出来る事ハやうに上杉
則政伊天軒なるに成るといふ之樂方へ玉
繩といふ者と誠されハ如何して拵へきやと
ハ右決ある之樂役者に対面して伊の方ハ知
仕ハ文大夫代官ひ頃さかくといふくよ清事
成るときたあり古今に拵きたれ家代元も
小係と仕諸給ハ人事千に一も其道なくハ
と日と経ハくやも味方に敵出来て内士扇

成るんと存しハ中に一向に自分代謀と問
給ふ小我乃来虎と教入伊ら者に拵ハ来
虎ハ古今稀なる勇将にてハ之士と成る道天
代生得する者にハ長生にさくハくハと之へき事
目おにハさてまさ俗にも約諾と変して法
瞞さ板廻と仕さる素質代人にハ来虎頃
堂ゆうにといふくハ来ハ元より代弟小ら縁
し合せ氏康と出さるやうに謀り帰しハ

へし口惜ひる一万石とる所者と持いく戦後
へ所々遣こハ中ま〳〵くいへ〳〵る数と遣〳〵い
ともこ千に出きさる小物にて如何よいて
も一旗にく〳〵を功成かさ〳〵を迎者せ〳〵と
ける　松隣寄語

一　天文二十年古国之樂花札と汲て京虎公へ
関東の成行と注進ゆ右に依く京虎公
関東進発代事と急速にお行〳〵立い
しいく〳〵る甲州賀州の取合さし競ひ兎角
交引出来〳〵一両年中有無につき
く奥筋へ出馬と出さるへき事既小一決〳〵に
〳〵七組代老将小陳伊豆守佐渡守駿河出
山城材河和泉等右議〳〵諫言と申上ら
迫年代中関東に進発を陳々に出に存事
ていまるく先以て京都へ出る便成され
迫落及代伊君達と一旦下〳〵せ〳〵れ公

方く號し威と備奥筋清水と稱て國郡と
度くに成るに隣くれは計策に乏にいを故に南北
吾朝爭國くなり勇將謀士多くいといへとも
以て形く武田晴信と以て無雙の良將と中年
にい吾くも多年に屬し多方に力當て
見いに允味方二倍之倍に欲い只よさ擒とこ
そ存別ていへ是能しかり當家の弓箭地
に異なるゆへなり又織田信長と大身の將にて

いへとも以て形く晴信へと一年に十度に及
ひに音書と交し書翰に文章を外様下
人やうに仕れさて又佐く權左衛門と都
筋に用のためとく市城下へ相詣させ如行
にもして市業色宜しさやうにとの結構
よいに代に方しすいハ首尾まてに一年に唯一度
に使と遣ハされに書札等孫に遞下けしる
成されとにいへとも今まて竟に行ものなし

無沙汰なるさま子細ハ信長見切れかしこき
人にて隨敵乃謀を仕〳〵而ハ以覺ハへ
信長ゟに仰る大軍に成〳〵れハ〳〵武田も
以公所も無事とやふり〳〵さるへくハ弱將
にても十倍の敵にゟ勝すと〳〵ゟ仰て武
田ハ奥に練〳〵る將にて〳〵と〳〵ハ意と推察
し用〳〵ハ駿河をハとたつけ尾濃に背
かゝへと新へさきを支度と取ハり及ふ事に
ハ當家ハ元亀元年ゟ村上義清に
ハ頼まれ光功の武田と度〳〵戦と遂〳〵れ
文さ人ハ座ハに今更まる極運に憲政にハ
頼れ大敗乃小係と取合と始〳〵れハやうれ
板にゟ以家中れたゝ頼ハ行て其途絶て
光ゟく以今れさまにてゟ帰ゟる義武田も
以家も信長に倒されゟ事疑ひゟく以一
代ハさるにくも弓筆れ上にてれ以不覚ハあ

るすくはへとも未これに忍量すてハ先来
あさけ事にハ往昔より以来二代三代右續さ
て良將ハ先つ〳〵ゆさるに依て都へ出る便と
成されは迚海及とハし糸〳〵せらき成と取て
東國とハ治めり成されハ事ハ至所の事ハ
さて亜洲表中我、請侍れしあ先考さ益
ゆ〻ハ深にてハ沖前にとハ〳〵恐入奉しる
ゆ上事にハへとも我、武ハ若利と以て生涯を

楽みゆ外高上れ志これなくハにすりて如
何にもして一度都へハ旗と建られ命れ
中より天下れ立しる伺さ奉るへき志願にハ
洲年齢今二十二歳朝場の御く發せるう
こと〻思ひ立れハよといてハ成功いうてう
疑ひこれなくへかく〻ゆハ文るるまつ東國を一
二遂國も治めり成され信玄ハそもかくて
も底心乃懼しき大將よてハへハ立亜ハて

国立公文書館
National Archives of Japan

相叶ふまじき信長と合戦と成され東上せと
一向宗国之衆へ相附られ北條と押へさせ権右
衛門と推つゝ成と云て織田松平と落
らひ二口より甲州へ取寄せ年月と送りは
ゝ信玄何方と軍にかゝる時にてもい
ひまそう保ちやうさるへきや只今ハ氏康と信
玄入魂にはへるも久しき謀よりハ是迄年月
門必ず以て取合に成はへゝ さゝく武田うく

押倒し成されはゝ信長氏康等ハとゝかく
も恐るゝ足らさる義にハ御所国何方とも
雪深にてはへハ春ハ秋乃ハ七月
の頃先陣を加賀越中にとゝく推右衛保
大聖寺勝沼等と取合信州甲州にく信玄
と戦ひまゝ長途と戦ひ 東國へ出ハ小深等
と大軍と成されは軍辛労仕り未の頼
光おくしてゝ安堵の後と中上る京虎委

細等百〇七人の不幸低徊くい悲しい
其生涯始終を第九道を覚悟一筋不変れ
ひとしくも唯今ヨリ如くハ我素と云ふ
仮しい行末の後ハ縁しめ期する所に行くを
先東國発向九後を如何にも吳見よ扶ふ
へくい不逢家中九ためと思ひくいハ千万
ハ入らさる事にハ為来れつきて自ら
命と泉下に投して一期の恩を謝を文

主として従者に恩と共へ地と施をこと
吾一人に行くを今古以て絶なり云れを
則ち先金〇天恩にて来虎う共ふる所に
行くを故ハ千金より一文ハ主さ當世の風
俗にてハ今日當家に帰を得し人の日を
又他家にとそ禄と久事疑ひす一人
として捨身と傷ふ者ハ行くへを
先と人九不ふ〇ふ九ハ外ち吾吾法九

一命を受へき道理なり道理尤おきに命
を給はるゝ謝せへかゝせ来虎尤とおもふ
ゆへ取申諸士代たり身命を投て泉下に
投せん事を痛まし思ひと雖も吾々
一身家来代法士又俗多れハ何方にむき
て謝せへき事と知ゝ代吾常に尤と思惟
せるに唯行城の場を去ゝ尤と快くせ
んことを仰けゝと取ゝ七人代老士を
しめ列座の面ゝに及ふまて感涙肝に落
言葉なくして退出せ　同上

藩鑑巻之二百八十三目録

う部六

上杉彈正大弼藤原輝虎

国立公文書館
National Archives of Japan